

# まちづくり ひろしま

第34号 (平成30年3月15日)

読者数：597名 (募集中)

メール：[hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp](mailto:hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp)

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

## □ 巻頭言

### まちとアート

アーティスト 石原悠一



「まち」は、専門性を持った多くの人々の分業が入り組み、重なり合い成り立っている。人々が暮らす行為の集合体が、一連の脈絡を持って相互作用し合うことで、ある種多細胞生物のような様相を呈しているのだと思う。

私は2014年からカンボジアでアートとサッカーを通じた交流を続けている。現在、首都のプノンペンには高層ビルの建築ラッシュ。大規模な土地の造成が行われ、都市開発が急速に進んでいる。某日本製高級車が多く走り、バイクもピカピカなものが多い。子ども達と“Happiness”というテーマで絵を描くと、一眼カメラやスポーツカーなどの最新のモノを描く子どもも増えてきた。

カンボジアは、2004年から2007年までの4年間、GDP成長率10%を超える高い経済成長を記録。2011年以降は約7%である。タイの約3%やシンガポールの約2%、日本の1%前後を考えると、やはり高い値だ。さらに、内戦の影響もあり、人口は30歳未満が60%、40歳未満であると75% (2015年推計) を占めている。若年労働力が充実している国なのである。(出典：IMF World Economic Outlook Database)

これらにより日本の外務省ホームページには、カンボジアは“堅調な縫製品等の輸出品、建設業、サービス業及び海外直接投資の順調な増加により、今後も安定した経済成長が見込まれている。”と書いてある。ただ、高層ビルの建築途中で企業が撤退し放置されていたり、郊外にはまだ広大な大地が広がっているため古い建築を取り壊さず、すぐ横に新しいものを建てていたりしている場所もある。経済的自由主義の流れで、いずれそこもどこかの誰かによって再開されるのだろうか。貧富の差は広がり、消費に走る生活様式が影を落とす。ちなみに、近年バイクがピカピカなのは、高压洗浄機でバイクを洗う商売が路地裏などに登場したからである。人々はきれいに掃除されたバイクが走っているのを見て、公共に対する意識が刺激されたはずである。新たな価値観の広がり、バイクを洗えば稼げると知った人との相乗効果によって、急速に都市を走るバイクがきれいになっていた。凄まじい速度で経済発展することで、急速なミーム (情報伝達における単位) の変化が起こっているのである。

広島では、ここ何年も跡地開発についてスポーツ競技場や商業施設、医療施設、広場などの大型建築を中心に議論し、そのようにマスメディアも市民に伝えてきた。郊外型大型商業施設や競技場などでの経済活動は、限られた時間内にとっても大勢が集まり強力に行われる。そのため、経済効果としては満足しやすいのかもしれない。オルテガ・イ・ガセット\*1の“充満の事実” (少数者の場所を大衆が占めている) である。

しかし、“多様性”がキーワードとして挙げられることの多い昨今において、経済性を考えつつも都市の多様性を求めるときには、やはりジェイン・ジェイコブズ\*2の言う混合一次用途の必要性 (2つ以上の主要機能を果たさなければならない) 等々の考え方が重要なのではないかと思う。都市開発のダイナミックな変化は、創出と利用のバランスにより、安定したも

のとなる。これには、市民のフォロワーシップも欠かせない。

では、社会の中における広義でのアーティストという存在はどのような役割を担うのか。私はそれこそが、多様な価値観の緩やかな共存に関わるものだと思っている。アーティストは多少の違いはあれ、社会に存在する様々なファクターを対象に、分解、濾過、再構築などを繰り返して身体性と精神性を行き来しながら熟考し、言語を含めたいろいろな方法で美しさを求めた表現をする。

そしてそれにふれる人々は、その多様なアート（表現物）によって感性を磨き、視野を広げ、結果的に多様な価値観を建設的に受けとめ合うきっかけを得ているのではないだろうか。社会のバランスに目を向け、市民のフォロワーシップを促すためにも、アートの力は有効だと私は思う。アートが街中にあるということは、単に景観美のためだけではないのである。

- \* 1. **ホセ・オルテガ・イ・ガセット**：1883-1995。スペインの哲学者。「生・理性」「歴史理性」の体系化を進めた。著書には「大衆の反逆」「人と人々」「ドン・キホーテに関する思索」などがある。
- \* 2. **ジェイン・ジェイコブズ**：1916-2006年。アメリカ合衆国ペンシルベニア州生まれ。都市活動家、都市研究家、作家。「都市の原理」「都市の経済学-発展と衰退のダイナミクス」「アメリカ大都市の死と生」など著書多数。

## ひろしまのまちづくりの動き

### ① 平和大通り芸術展開催！

平和大通りを舞台にした芸術展が広島市などの主催で1月27日から3月4日まで開かれた。初めての試みであり、初日のオープンセレモニーでは松井市長が「年間を通して平和大通りの賑わいを創出したい」と挨拶。

展示エリアは白神社から広島クリスタルプラザ前の緑地帯周辺で、6人の作家が出展している。

展示は立体作品や映像、写真など、木立の中に溶け込むように置かれている。このエリアが選ばれたのは、日本を代表する彫刻家柳原義達作の銅像「ラ・パンセ（瞑想）」が建っていたからという。

2016年に発足した「平和大通りにぎわいづくり検討会議」の中で検討がなされ、社会実験をしながら活用策を探ろうとしている。

#### (コメント)

今回は実験的な試みであり、出展数も少ないので、盛り上がりには欠ける点はやむを得ない。作品を年々増やして展示エリアを拡大していき、将来的には国際コンペで多くの作品を募って、審査経過が分かるような芸術祭にまで発展させ、平和大通りの一大イベントになればよい。



銅像の前でオープンセレモニー



竹と遊ぶ  
(石丸勝三作)

### ② サッカー場の中央公園案に地元団体が反対の要望書を提出！

サッカー場建設の候補地となっている中央公園に対して、地元基町地区の住民でつくる「基町の明日を考える会」は、2月14日に候補地から外すことを求める要望書を広島市長、県知事、商工会議所会頭の3者に提出。

要望書では、「サッカー場の建設が地域の活性化につながるとか、利便性が良いという3候補地の比較検討は利用者の視点ばかりで、地元住民の視点に欠けている」と批判。

それに対して松井市長は、「先に基町地区のまちづくりの方向性を示し、理解を得てから、サッカー場としての説明を行うように出直したい」と回答。

#### (コメント)

基町地区のまちづくりの方向性をどうやって示すのであろう。隣接する中央公園の自由・芝生広場や広島城エリアの他、球場跡地を含む中央公園全体の構想を持たなければ、解は見つからない。しっかりした体制を整えて、じっくり取り組んでほしい。

## ○ 広島復興の軌跡・人物編 (第9回) ～小野 勝元市職員～

～市職員として復興過程に関わり、かつ冷徹な同時代的証言者であった人～

前号の元任都栗司市会議長に関連して登場した小野勝氏、当時市職員として極めてユニークな存在であったので、人物編の続きとしよう(以下敬称略とする)。

「小野は復興過程の情報提供者」であり、かつ当時の関係者であったこと

個人的なことから始めて恐縮であるが、小野との出会いは、たまたま小野の話を知る機会があり、そこから多くの情報を得たことからであった。被爆時には燃料配給統制組合勤務で、前日8月5日(日)小野は宿直担当であったのに、そのことを忘れてしまっていて宿直をしなかったという。6日朝は燃料会館にまだ出勤していないで自宅にいて、直接的な被爆を免れたという。

1982～3年頃、広島新史シリーズの編集中で、私自身が「広島新史／都市文化編」の担当・執筆を仰せつかっていた。それで広島市の復興過程についての集中的な情報収集作業に取りかかっている、小野に対しての様々な疑問を投げかけた。「復興審議会はどのように運営されたか」、「長島敏復興局長はどのような人であったか」、「外国人の復興顧問はどのような役割を果たしたか」、「丹下健三はどのように復興審議会でも振る舞ったか」等々。その質問に対して小野は的確に答えてくれた。

小野は、「ニトさんと私」を著し、その中で「私の任都栗観」を「(この書を)書き留めておくことは、新聞記者から出発して、ほぼ同じ道ゆきの生涯を送って来た私の、一つの意義のある仕事ではないかと思いはじめた」として、任都栗への理解を示し、多くの情報を提供している。その一つが、平和記念都市建設法制定に至る過程の中で、戦後直後からの特別補助・国有財産払い下げ運動期から1948年11月頃から翌年にかけて、国会請願運動期に移行することになったという、決定的な情報を小野からいただいた。すなわち、その請願運動の中心的担い手が、任都栗であったこと、当時その国会請願運動の意味の最もよき理解者であったことを指摘し、かつ、当時の多くの関係者の関わり方の実態を証言し続けたのが小野であった。

広島市の財政難から特別補助や国有財産の払い下げ運動を要求しても実現しないとみるや、広島復興そのものを国にやってもらおう(即ち復興国営)ではないか、という一見わかりやすい方針を掲げ、1948年11月に市会議長になったばかりの任都栗が、市議会を動かし、市長とも連携して展開したのだった。だが、広島市が如何に困窮していたとはいえ、特定の都市の復興事業を国営事業として取り組んでもらうという発想は、虫の良い要求であり、簡単に実現するとは思えない運動であった。こうして結果的には現実化しなかったが、この期があってこそ次のステップすなわち特別法制定運動期に移行できたということで意味があった。

「小野は同時代の証言者であり、あり続けることの出来た人」

戦時中からの広報発行業務を担当していた経験を生かせることから、小野は創設されたばかりの広島市復興局において、戦時中からの広報発行業務を担当していた経験を生かし、広報活動担当を任されたという。そこで「復興だより」の発行を任せられ、さらに復興局関係に限定せず市政全般にも広報を取り扱うようにという要望も取り入れて小野の主管となり、1946年3月末、復活「市報第1号」を発行したという。

また小野は復興局にあって長島敏局長と同室で、(自分が)「広島不案内の局長にいろいろ説明したり、陳情、相談の窓口になったり、マスコミとの連絡に当たったり、局内各課との連絡調整に当たるというような便利屋みたいなことでした」、(当時の広島市の組織が)「有能な都市計画家長島復興局長を在任十ヶ月余りで退任に追い込み」と振り返っている。長島局長は小野によれば「東大の土木工学卒業の非常に紳士的な技術家には珍しい情緒、感情豊かな人でした。その反面、硬骨、剛直なところがあって(中略)、反感を買っているいろいろいやがらせをされ、」と述べている。長島局長はハイカラな局長であったが、広島では浮いた存在で、当時の浜井助役ともそりが合わず、結果的には早々に辞めてしまったのであった。

小野の記憶によって、戦後復興に関連したいくつかのエピソードを示すと、上幟町の女学院の校地を補助道路で東西に分割したのは長島の強い意志で、反対があっても動じなかったとい



モンゴメリーと対談する小野勝

う。もう一つ、第1回の平和祭でならした鐘は、中国から持ち帰ったチャペルの鐘であったとされる。その他いくつか面白いエピソードを披露できるが、機会があれば改めてとしよう。

小野は総務課長までなったようであるが、1948年1月あっさり市を退職してしまい、それ以後社団法人「広島文化社」という組織で「文化通信」という定期ニュースの刊行に携わった。1948年10月「文化通信第18号」を発行し、それ以降、市広報代行の役目も果たして「市政の動き」を編修し、市に納入したという。その間、2年6ヶ月広報代行业務を担ったのであり、結果的に情報公開がなされ、現在この情報は貴重な史料となっている。



小野と対談するモンゴメリー

かつて広島市復興顧問であったモンゴメリーが、1984年1月広島市を訪れ、かつての顧問活動に対する評価や復興問題の課題等への問い合わせをしようとしたことがあった。そこで元広島市復興局職員として小野が対面して当時のことなどが回顧された。小野はかねてよりアメリカ・GHQに対して広島復興への支援が十分ではなかったとして不満を抱いていたが、モンゴメリーが密かにGHQに働きかけたりして援助を引き出そうとしていたことが分かり、かつ結果的にはGHQ側は相手にならなくて、不首尾に終わったものの、モンゴメリーが余りに謙虚な姿勢であることを知り、小野は率直に驚き、素直な感謝の言葉を発したのである。

### あとがき 一 冷徹に見つめ同時代を証する

歴史の表に出ることが少ない行政関係者であっても、現場にいて、もしその時のことを問いつけられたとき、その時のことをきっちり報告できる人、まさに時代の証言者になれるような人、要するに冷徹な証言者として振る舞えるような人、小野はその資質を備えていたということであろうか。

(参考資料)

(編集委員 石丸紀興)

小野勝「ニトさんと私」(自家本)、「不確実な真実」(自家本)

当時の文化通信、「元復興顧問と復興局職員の会見記」(1984年1月15日)

注1) 石丸紀興著「広島戦災復興時における復興顧問ジョン・D・モンゴメリーの計画思想とその果たした役割に関する研究」(日本都市計画学会学術研究論文、2009年11月) pp.136-139

## ○ 人物登場：小沢康甫氏 (へそ曲がり倶楽部)

### ★ これまでの軌跡

大竹市生まれ、育ち、現在も居住。大学卒業後、中国放送に入社し、アナウンサーや制作・報道現場を経験。要職を経て60歳で退職。

制作部時代に放映した「暮らしのなかの左右」の反響がよく、深みにはまるきっかけとなる。縁あって広島大学の非常勤講師として同種の講座を務める。9年前に「暮らしのなかの左右学」を出版し、今でも公民館等からの要請を受けて講演を行っている。

出向で2年間松山勤務。同じ瀬戸内でも風土に違いがあると気づき興味を持つ。瀬戸内のすべてが分かる百科事典を作りたいと思い立ち、生活文化関連の資料を集め始めた。編集・分担執筆した「瀬戸内海事典」を退職直後に出版。その後は主に食べ物について情報収集。

### ★ 異業種交流会「へそ曲がり倶楽部」設立

人生は単線ではなく複線で生きたいと思い、放送畑以外の人と組んで現職時代にへそ曲がり倶楽部を設立。月1回の例会で昨年200回を迎えた。これを機に世話人代表を降りる。会則や年会費はなく、ゲスト(テーマ)によって気軽に参加できる異業種交流会を目指す。リラックスしてざっくばらんに話が聞けるスタイルが長続きの秘訣か。

### ★ 「左右の話」と「瀬戸内の食の話」

自分にとって「左右の話」は人生の伴走者。コーヒーカップの取っ手の位置から天体の惑星の回転まで、すそ野が広く奥が深い。左右の物差しを持つと発想が豊かになり、世界が広がる。損得勘定抜きで面白い。マニアックだが、奇人・変人のレッテルはありがたい誉め言葉。



略歴：1947年、大竹市生まれ。1970年慶応大学卒業。1973年中国放送入社。2007年退職。2001年から異業種交流会「へそ曲がり倶楽部」運営

瀬戸内の食べ物は新鮮な魚だけではない。ご飯類、麺類、魚、野菜、果物、酒・調味料、菓子・パン、・・・。「瀬戸内を学ぶ会」に関わった時、水を味わうツアーを企画したことがある。

## ★ 広島のみちへの提言

生活臭のする小路が一扫されてきれいになったが、薄っぺらな感じ。広島は平坦な地で変化に乏しいからこそ、迷路のような路地裏が所々にあった方が面白い。尾道のまちにはそんなワクワク空間が残っており、若い人や観光客をひきつけている。

広島も水の都構想により水辺のイベントや水上交通等に力を入れているが、視・聴覚だけでなく味覚に訴える観光コースがあってよい。水に恵まれた広島の食文化の物語を紡ぐ「水の都・食巡り」や酒蔵を訪ねる「瀬戸内バックス紀行」など、観光メニューも複数用意しておく。

まだ広島が持つ資源を活かしきれていない。例えば、白神社は広島城築城時の海岸線だったが、平和大通りに水路を造って潮騒の昔を蘇らせる試みなどはどうか。戦前からの歴史を刻み込み、重層的なまちになっていけばよいと思う。

広島のみちづくりは生真面目すぎる感がある。正面ばかりでなく脇道に入ったり、背後から見たりが必要。最初からベクトルを定めるのではなく、いろんなジャンルの人たちが放談しているうちに次第に方向性が見えてくるのではないか。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）

## □ ほっとコーナー

### 『受け継いでゆくもの』

on the Earth 合澤 愛瑠（エル）

私は日本で唯一、村にあるというキャンパスで大学時代を過ごした。さすが、村にあるというだけあって、キャンパス内には牛やヤギや羊、ダチョウが自由に放牧されていた。大学の裏には農道が走り、左右にトウモロコシ畑やむぎ畑が広がり、夕暮れ時には目の前に広がる南アルプスが真っ赤に染まる美しいところであった。

近所でお米とお野菜、果実を育て、鳥を飼い、ほぼ自給自足をしているおじいちゃん、おばあちゃんに出会ったのがきっかけで、自給自足をしているおじいちゃん、おばあちゃんを探しては訪ねるようになった。

長年の経験から、カンで全てをこなしていく。土づくりにしても、保存食づくりにしても、カンで適当にやっていて一番おいしいものを作ってしまう。私が見様見真似で、同じものを作っても全く違うチンプンカンプンのものしかできない。何十年も繰り返し、繰り返してきたからこそ学んだカンがそこにはあるのだ。

冬はマイナス 10 度になることもあるほど寒いところだったので、冬になるまでに様々な保存食を蓄える。ふきのとう味噌、ふきの佃煮、茄子のからし漬、きゅうり漬、ニンジンの味噌漬、大根の糠漬、野沢菜漬、梅干しにブルーベリージャム、干し柿、栗の渋皮煮、杏子の砂糖煮、リンゴジャム、、、、書いていただけでご飯とお茶が欲しくなる。休む暇もなく、畑か蔵か縁側か台所で作業している。

一緒に過ごすことで、少しずつカンを教わった。あれから、かれこれ 10 年、やっと美味しい梅干しやお味噌ができるようになった。失敗して全てダメにしてしまったこともあるが、その経験が無駄ではなかったと思う。

去年、うまれ故郷の江田島に帰ってきた。今度は海のそばでの島暮らし。島ならではの暮らし方がそこにはある。この冬は 85 歳を過ぎて現役で柑橘をたくさん育てているおじいちゃんのところを訪ねた。段々畑の石段もすべてお手製。全長 50 メートルはある石積みが 6 段。車の通る道路はだいぶ下の方だ。この石を全て一人で運んだのかと思うと気が遠くなる。

江田島にはこのような段々畑がたくさんある。しかし、後継者がおらず、放棄されてしまい枯れていく柑橘の木が後を絶たない。段々畑を耕す人もいなくなる。段々畑を作る人もいない。何十年も手をかけて育て上げてきた樹や石積みと一緒に何十年も培ってきたものが途絶えようとしているように思えて仕方がない。

この貴重な宝が途絶えないうちに、私達の子供達にも受け継いでいけるように、今自分にできることを考えたい。



## ○ 広島市中央公園を考える③ 丹下健三氏の「広島平和都市建設構想案」

これまで過去に中央公園のあり方について提案された内容を整理し、分析している。今回は、1950年に丹下氏が提案した「広島平和記念都市建設構想案」について、丹下研究に造詣の深い広大准教授の千代先生に紹介していただく。

### 丹下健三による「広島計画」

広島大学准教授 千代 章一郎



広島における丹下健三（1913-2005）の活動は、1949年7月「広島平和記念公園」の設計競技に当選し、平和記念公園が実現したことで知られている。構想のうちで当初実現に至ったのは慰霊碑（1952）、陳列館（1955）、本館（1955）等の建物であり、公園の園地整備そのものは広島市によって実施され、また白土設計事務所による新広島ホテル（1955）と公会堂の複合施設が公園に組み込まれるなど、全てが丹下健三の手によって実現したわけではない。第二次世界大戦後の戦災復興事業において、都市計画の財源、事業の決定手続きなどは極めて流動的で混乱していた。

一方で丹下健三は、当選直後の1950年、中島地区にある「広島平和記念公園」を原爆ドーム北側の基町地区にも拡張した計画を策定し、さらにその一区画を「広島児童センター CHILDREN'S CENTER」として基本計画図を作成している。

丹下健三はこれらの一連の構想をまとめて、「広島計画 HIROSHIMA PLAN 平和都市の建設」として発表し、「都市のコア」を主題とする1951年7月第8回CIAM（近代建築国際会議）

（CIAM8, Hoddesdon, England）においても発表している。中島地区の平和記念施設、基町地区の芸術文化施設、児童施設、運動施設の複合体が、「都市のコア」を形成するという構想は、広島だけではなく、戦後復興期におけるモダニズムの都市的意義を象徴的に示している。丹下健三にとって、「都市のコア」は被爆の歴史だけではなく、戦後復興という世界的な課題として芸術・スポーツ・子どもという主題を含んでいた。

しかしそれらは、純粋に丹下健三の内面に生じた理想像の広島版ではなかった。

「私たちが考えた広島のコミュニティ・センターは、しかしきわめて特殊なものであった。それは広島市民生活再建の中核的な施設であるばかりではなく、さらに、あの広島の記憶を統一のある平和運動にまで展開させてゆくための実践的な機能をもった施設であって、それに加えて、記念塔のごときものの必要を認めなかったのである。

しかし、そのような判断にもかかわらず、私の心情は、迷わざるを得なかった。慰霊堂を含む記念塔を、広島の人びとが求めていることのなかに、意味があるように思えるのであった。無垢の犠牲者を、父や母や、妻や子にもつ広島の人びとの願いにたいして、何か慰霊し、祈念するための施設を、ささやかなものであるにしろ、もちたいと感じたのである。これが、私たちの答であった。」（「広島計画（1946～1953）」、『新建築』、1954年1月号より抜粋）

慰霊碑だけではない。「児童文化センター」の構想もまた、地元の学校教師らを中心に結成された広島児童文化振興会による「広島児童文化会館」と無関係ではない。「広島計画」の構想過程において明らかなのは、むしろ外在的諸要因を内在的論理に消化するような丹下健三の社会的感性・風土的感性・芸術的感性である。だからこそ「平和を創り出すための工場」（「広島市平和記念公園及び記念館競技設計」説明書）としての広島の「都市のコア」は、過去と未来の再創造であり得たし、陳列館から原爆ドームへの軸線は、基町地区にも広がっていかなければならなかったのである。

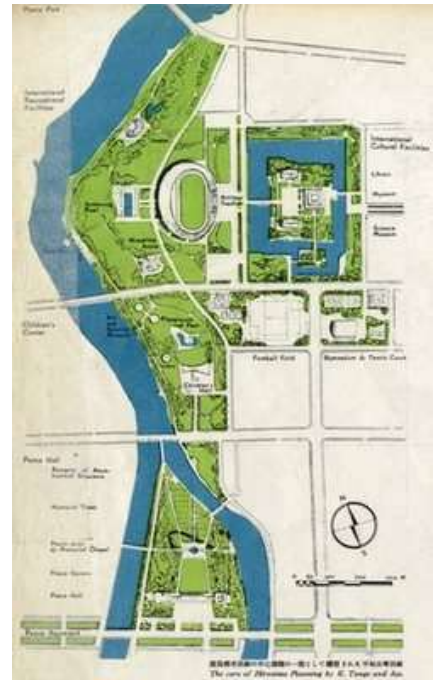


図 第8回CIAM会議においてプレゼンテーションされた丹下健三による「広島計画」の配置図（1950）

出典：J. Trywhitt, J.L. Sert and E.N. Rogers ed., *The Heart of the City: towards the humanization of urban life*, Kraus Reprint, Nendeln, 1979, p.136.

(参考資料) 千代章一郎著、「丹下健三による「広島平和公園計画」の構想過程」、日本建築学会  
計画系論文集、第78巻、第693号、2013年11月、pp.2409-2416

### <編集者のコメント>

丹下氏は平和記念公園と中央公園を広島の「都市のコア」と位置づけ、過去と未来を再創造する「平和を創り出す工場」にしたいと考えていた。平和記念公園は原爆死没者を慰霊し、過去を振り返る場とし、中央公園は未来を築く芸術・スポーツ・こどもを主題に置いていた。

今もそのコンセプトは生きているのではないか。被爆都市広島のあり方が世界から注目される中、もはや「広島のコア」だけでなく「世界のコア」を意識していかなければいけない。

この地に世界の人たちが訪れて、原爆の惨たらしさを感じ、そこから立ち上がり、はつらつと生きているさまを目にすれば、平和の尊さを実感してもらえらるであろう。

中央公園は、芸術を愛する人たちの発表の場であり、スポーツを楽しむ人たちの競技の場であり、遊びや学びを通して子供たちの成長の場であり、それらをみんなが温かく見守る場であって欲しい。それが、丹下氏の描いた「平和を創り出す工場」ではないかと思う。

(編集者 瀧口信二)

### 😊 街角ウォッチング 😊

宮森洋一郎建築設計室主宰 宮森洋一郎

学生時代より、デザインサーヴェイや路上観察研究部の刺激を受け、「街角ウォッチング」の眼は続いています。家族旅行での私の影響か建築に何の関係もない娘達も、色々変わったシーンを見つけてはおもしろがり、写真を撮ったりしているのを見ると、少しうれしくなります。

建築家の集まりである「建築数人会」では以前「準工業地域の美学」と称して、美を意識せず合理性、経済性に基づいた目的的な風景に見られる美を発見する写真を展示させてもらいました。

その流れで5年前に「東平塚 美の再発見」と名づけて、所員みんながカメラを持って事務所を出て、東平塚の三角地域内に限って「美」を見つけるというゲームをしました。

目のつけどころが各人各様でおもしろい体験でした。その時に私の撮った写真です。やはり、偶然・無意識にできている「美」に興味があります。所員にもこの傾向は強く、我が事務所にカメラを向けるものは誰もいなかったのは少し残念でした。ここ5年の間に町内も古い建物が取り壊され、ワンルームマンションが建ち、コインパーキングができ、空地が増えてきています。空きビル、空室も増えてきています。

これはこれで写真にはなるのですが、街角の空気は変わったものになると思われます。そろそろ「東平塚 美の再発見 そのII」をやってみたいと思います。



東平塚地区エリア



## ○太田川放水路完成50年記念シンポ：「太田川のこれからを考える」報告

太田川放水路が昭和43年の完成から50周年を記念し、これまで放水路の果たしてきた役割と太田川の将来について議論する。

◇ 日時：平成30年2月4日（日）13：00～15：30

◇ 会場：広島県民文化センター

◇ パネリスト：氏原睦子（NPO法人雁木組理事長）、佐々木茂善（広島県観光連盟会長）、竹村公太郎（NPO法人日本水フォーラム代表理事）、山地正宏（広島市都市整備局長、市長代理）、徳元真一（太田川工事事務所長）、コーディネーター：佐田尾新作（中国新聞社論説主幹）

◇ 主催：国土交通省太田川工事事務所、広島県、広島市



パネルディスカッション

### ■ 映像「太田川放水路のあゆみ」上映及び小学生による発表会「太田川を学ぼう」

- ・イントロとして、太田川放水路の建設に至る経緯から現在の状況までの記録映画を上映  
三角州の上に城下町が築かれて以来、広島市の街地は絶えず洪水の脅威にさらされていた。昭和7年から国による太田川改修工事が開始されたが、戦争により中断、昭和26年に工事が再開。着手から36年かけて昭和43年に完成。完成後は市街地の浸水被害はなく、市内の川沿いは緑豊かな水辺空間が創出され、「水の都ひろしま」の実現に取り組む。

#### ・己斐小学校4年生が太田川について学習した成果を発表

最初に、「僕にできること」と「ぼくらの地球」の歌を合唱し、合間に地球環境を守るためにできること、そして地球を救うことが平和につながるというメッセージを大きな声で発表。

その後、太田川の河川敷や干潟で生きものや植生・水質等を調査し、河川管理者からの話を聞き、自分たちで考えたことをイメージマップや作文にして発表。

「太田川の上流と下流の小学生や親、地域の人がそれぞれカヌーに乗って出発し、出会ったところで互いの地域の情報を交換し、交流を図る」、「川辺の結婚式など出会いの場を設けて婚活をサポートする」ほか、子供らしい自由な発想のアイデアが飛び出す。



### ■ パネルディスカッション～太田川のこれからを考える～

- ・徳元：河川管理者の立場で、太田川放水路の歩みとその役割・効果を説明し、今後の方策を紹介
  - ・放水路の完成により治水安全度が高まり、市内の他の川の大規模改修が不要となる。その結果、川沿いに遊歩道や公園、緑地帯を整備することができた。治水と親水性と景観を考慮した基町環境護岸を整備し、川辺の利活用の社会実験としてオープンカフェなどをスタート。
  - ・近年、豪雨災害が増え、今後も安全とは言えないので、ハード面の整備だけでなく、水害時の防災行動計画等のソフト面の対策も推進。
- ・山地：広島市の街づくりの観点からこれまでの歴史と将来について紹介
  - ・広島のみちは近代的な交通機関が発達するまで、舟運が盛んだった。そのため荷揚げ用の雁木が多数残っている。現在、川岸のオープンカフェ、水辺のコンサート、猿猴橋の復元、川の駅など、「水の都ひろしま」とともに「花と緑と音楽」の広島づくりを推進。
  - ・200万人広島都市圏構想に基づき、川から海への水上交通のネットワークを強化し、周辺市町村や島しょ部との連携を図っていきたい。
- ・氏原：太田川を利用する側として、雁木タクシー等の活動を紹介
  - ・雁木組は雁木タクシーを柱として水辺のまちづくり活動をするボランティア団体。雁木タクシーは広島駅や縮景園と平和公園を結ぶコースに人気があり、12年間で約6万人の乗船。利便性は劣るが、川からの眺めに感動する人が多い。



- ・歴史的な雁木の文化的価値を検証し、使いながら後世に残す取り組みを行う。
- ・**佐々木**：一市民として太田川への思いと観光連盟サイドの提案を紹介
  - ・実家が放水路の近くにあり、子供の頃はよくシジミ取りやハゼ釣りをしたり、グラウンドで野球をしたり、太田川とともに郷土愛が育まれた。
  - ・親水公園など、市民の情緒的な面での利活用に期待。関連企業と連携したアウトドア教室、バーベキュー広場、市民ハゼ釣り大会など。放水路完成50周年を機に、遠大な放水路構想と同等の長期的視点に立って、太田川と広島のみちづくりのランドデザインを考えてはどうか。
- ・**竹村**：幅広い見地から、太田川の独自性と河川の持つ役割について強調
  - ・もし太田川放水路がなかったら、市内の川は2.8mの堤防が必要。市民と川と一体となった今の関係が絶たれていたであろう。潮の干満があり、身近に干潟に接することができるみちは稀有である。
  - ・明治に制定された旧河川法の主な目的は治水と舟運。昭和39年に利水が追加され、平成9年に環境が加わる。当時の大蔵省からその目的、効果を問われて苦慮したが、自然体験をすると子供の道徳観、正義感が高まることが文科省のデータで裏付けられた。そこに川の環境を整備し保全することの意義がある。
- ・**佐田尾**：コーディネーターとして取りまとめ
  - ・治水神として崇められている中国の伝説の王「兎王」の教えとして、「治水のためには、石で固めること、木を植えること、堤防の上でお祭りをすること」が言い伝えられている。水辺でのお祭りの復活を推奨。

(編集委員 瀧口信二)

## □ 編集後記

すっかり春めいてきました。お読みいただいている皆さんいかがお過ごしでしょうか。

巻頭言で石原悠一氏は、「都市」は、様々な人々が暮らす行為の集合体であるが由にまちづくりは複層として解き明かされなければならないし、その都市の変化は市民のフォロワーシップから始まり、アートがその一役を担うと論じました。

最近、街中で色々とアートイベントが行われるようになりましたが、歩けない人、歩きにくい人、時間に制約のある人、高齢者、幼児・子供、様々な属性を視野に入れた「まちづくり一不自由者の視点」でなければならないことも必須条件です。

さてアート溢れる街に出かけてみましょうか。

(編集委員 前岡智之)

### ○お知らせ：「時代を語り建築を語る会(第20回)」開催

- ・語り人：平尾順平（ひろしまジン大学代表理事）
- ・テーマ：広島におけるNPO・NGO活動の現状と課題
- ・開催日：2018年3月30日（金）18：30～20：30
- ・会場：合人社ウエンディひと・まちプラザ 研修室C（北棟5階）  
（旧広島市まちづくり市民交流プラザ）
- ・会費：1000円（資料費・会場費）、学生・院生は無料
- ・参加申込：広島諸事・地域再生研究所  
電話/FAX：082-223-7226 メール：[nisimar5@hotmail.com](mailto:nisimar5@hotmail.com)
- ・主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表 石丸紀興）

《続く》

○お知らせ：編集委員の通谷 章氏が自伝をベースにした小説を出版！

- ・表 題：エーシャン・オーバー  
～海を渡る風～ <上>/<下>
- ・著 者：群青 洋介
- ・発行者：通谷 章
- ・発行所：(株) ガリバープロダクツ

ある日、「私」の元に届いた1通の手紙  
それが、忘れていた過去を揺り起こした  
蘇った過去は、一体、何であったのか——  
見たこともない妹たち、数十年前のあの戦争  
そして李王朝の血のざわめき  
分断の水域を挟んで  
様々なものが時間とともに炙り出されていく  
躍り出た「事実」、翻弄された「過去」  
すべてが、青くたおやかな海と  
滔々と流れる大河に飲み込まれていく  
国益とは何なのか？極東アジアの真の平和とは？  
エーシャン・オーバーに込められた願いとは？



\*メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて  
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！

(投稿は500字程度以内でお願いします)

編集委員	
石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表